

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた。」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、楯別こうしようという当てはない。ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町はひととかりならず衰微していた。今この下人が、永年使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから、「下人が雨やみを待っていた。」と言うよりも、「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた。」と言うほうが、適当である。そのうえ、今日の空模様も、少なからず、この平安朝の下人の sentimentalisme に影響した。申の刻下がりからふり出した雨は、いまだに上がる気色がない。そこで、下人は、何を措いてもさしあたり明日の暮らしをどうにかしようとして——「わはどようにもならぬ」ことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路による雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、さあつという音をあつめてくる。夕闇はしだいに空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めにつき出した甍の先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならないことを、どうにかするためには、手段を選んでいゝと**思はない**。選んでいれば、築土の下か、道はたの土の上で、飢え死にをするばかりである。そして、この門の上持つてきて、大のように棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊したゆけ、やうと「この局所へ達着した。しかしこの「すれば」は、いつまでもたつても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないということを肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来たる盗人になるよりほかに仕方がない」ということを、積極的に肯定するだけの、勇気が出すにいたしたのである。

【カンペキ単語】②

- 格別ニ入つた
- 暇を出すニクビにする
- ひととおりならずニまつうでなく、ひとへ
- 衰微するニ衰え、荒れ果てる

- 余波ニあおり、なごり。影響が及ぶこと
- 気色ニ様子
- いとまはないニ暇はない
- 低徊(ていはい)したあげくに「行ったり来たりした末にこの局所へ達着(達着)した」ところへたどり着いた
- 来たるべきニ来るはずの

〈問題〉

問1 「下人が雨やみを待っていた。」という文を、より正確に言い換えた文に、傍線を引きなさい。

問2 「暇を出された」とは、どういう意味か。クビになった。

問3 「勇気が出すにいた」とあるが、それは、どういう勇気か。

盗人になる勇気。

カットイメージのヒント

※このあたりは、説明が多いので、カットイメージ分け作業には向かない。

〈カットイメージ作業〉

一カ所だけ、明確にイメージできる部分がある。そこを四角の枠で囲んでみよう。

① どんな画か

↓カメラアングルをしっかりと意識しよう。どんな角度から撮るといいか。

周囲から集まってくる雨の音。

目から見える、重苦しい雲を、屋根が支えているように見える。

② この画には、下人の心情が感じられる。

(「心情が投影されている」と言う)

どんな感情が、書きなさい。

自分のこれからに対する不安と、戸惑いで重苦しい気持ち。

〈課題〉この場面での下人の気持ちを書き、心の中でつみやきの形で書きなさい。(例：よし、盗人になるぞ)

「やっほり、盗人になるほかに」

道はなにのたろうか...

〈課題〉この後に続く謎・疑問を挙げてみよう。

下人はどうするんだらうか...

盗人になるのたろうか。